

Edward Dorn の 20 世紀

Black Mountain 以後

平野順雄

エドワード・ドーン(1929-1999)は、ブラック・マウンテン大学でチャールズ・オルソン(1910-1970)の影響を受けた。オルソンとドーンが、①詩の舞台をどこに定めたか、②反資本主義の考え方はオルソンからドーンに受け継がれたか、の2点に絞って考える。

<『マクシマス詩篇』の二つの特徴>

『マクシマス詩篇』(*The Maximus Poems*, 1983)は、アメリカの建国史を書き換えている。政教一致を夢見た清教徒が、新大陸に渡り、アメリカを建国したという従来の建国史に対して、オルソンは、イギリスのドーチェスター・カンパニーが新大陸を漁業プランテーションにする目的で、漁師たちを入植させたのが、アメリカの始まりだと言う。漁師たちが入植したマサチューセッツ州アン岬のグロスターがアメリカの始まりの地となる。そこはアメリカ本土からアニスクウォム川によって分かれたれ、島のような自律性を保っており、古代ギリシアの都市国家 Polis とみなせるといふ。グロスターを中心にしてアメリカの歴史を描くのが叙事詩『マクシマス詩篇』である。

漁業目的で新大陸へ来た漁師たちはグロスターに住み、政教一致を夢見て新大陸へ来た清教徒はプリマスに住んだ。だが、トラブルが発生する。プリマスの清教徒たちは本国から来るよう漁師を募集し、漁業用棧橋(fishing stage)を準備した。これを、グロスターの漁師が無断で使ったことから、漁業用棧橋を巡る争いが起こる。プリマス住民は職業軍人マイルズ・スタンディッシュ(Miles Standish)を呼び、グロスター住民を鎮圧しようとする。この争いは、『マクシマス詩篇』の「手紙 23」では、「一つの植民地ともう一つの植民地の争いではなく、[漁師と]商業主義や生まれつきの資本主義との戦いである」(105)と捉えられている。

漁業を営み質素に暮らすグロスター住民をオルソンは支持するが、アメリカを牽引するのは資本主義社会の覇者だ。その好例は「手紙 16」(76)のナサニエル・パウディッチ(Nathaniel Bowditch)である。彼の体現する「ニューイングランド・マネー」は、「初期の産業と売買から離れ、/様々な腐敗と結託して利潤を追求」した。その結果「アメリカは、大国にのし上がった」が、「腐敗は土地と労働を呑みこみ、そして、今や/世界をも」呑みこむ。「手紙 16」はこのように訴える。

しかし、1950年にアニスクウォム川に橋が架かり、幹線道路ルート 128 によって、本土の商業主義や資本主義がグロスターに運び込まれるようになると、利潤追求を良いとする考えも住民の中に生まれてくる。「12月18日」(599)の中で、オルソンはグロスターもアメリカ本土と区別のできない「気が違った場所」になったと嘆く。17世紀以来の歴史的建造物マンスフィールド館(The Mansfield House)が、通りを行く人々にとって危険であるため取り壊しが決まり、跡地にガソリンスタンドができることになったからだ。3階建ての暗いバラ色のマンスフィールド館はなくなる。「12月18日」の冒頭付近は以下の通りである—“It [Gloucester] is a / part of the / country now mangled / mess of all parts swollen / & fallen / into / degradation.” (597)。歴史的建造物は取り壊すべきではない、と市議会や新聞社でオルソンは熱弁を振ったが、賛成は得られなかった。別の館の保存や湿地の保護も訴えたが、聞き入れられなかった。「利潤を追求する」資本主義には打ち勝ちたいのである。オルソンは自分を資本主義者ではないと言う(“I hope I don't sound so—among capitalists myself, like they say” [Muthologos 286])。彼は、資本主義に対して歴史や文化を保護する戦いを粘り強く展開したのだ。墮落したグロスターを可能な限り都市国家 Polis に近づけることを、オルソンは最後まで諦めなかった。

オルソンは、始まりの町グロスターを中心にして、アメリカの歴史を描いた。では、ドーンは、どうであったろう。また、反資本主義をオルソンから継承していたのかどうか。Gunslinger 連作を中心にこの点を考えてみる。

<オルソンとドーン：詩の舞台と反資本主義の系譜>

第二詩集 *Hands Up!* (1964)には、中西部の農家の主婦が通信販売会社の餌食になる様子が描かれている。家族の生活は、彼女の増加する負債によって支えられているのだ。通信販売会社は、支払いは後で良いと言って、彼女の負債を増やしていく。ドーンは、“On the Debt My Mother Owed to Sears Roebuck” (no paging)で、商業主義の残忍性を暴いている。この点ではオルソンを継承しているといえる。

Hands Up! の詩の舞台は、オレゴン州の町アストリア、テネシー州ナッシュビル、ウィスコンシン州モンロー郡トマなど西部や中西部の様々な場所である。オルソンのように一つの場所を中心にしてアメリカを描くという方向をとっていない。むしろ、ドーンは西部(the West)を意識的に選んで、西部の文学を開拓している。そこはオルソンとは異なる点である。

<Gunslinger 連作>

『ガンズリンガー』(Gunslinger)連作とは1968年から1975年までの7年間に出版された、*Gunslinger Book I* (1968), *Gunslinger Book II* (1969), *Gunslinger Book III* (1972), *Gunslinger Book IIII* (1975)を指す。

連作の大筋は、語り手とガンズリンガー(Gunslinger)それにキャバレー経営者のリル(Lil)、およびレヴィイ=ストロース(Levi-Strauss)という名前の馬、そして詩人の5人からなる一行が、リオ・グランデ(Rio Grande)川に面したニューメキシコ南部の町メシヤ(Mesilla)を出発して、ハワード・ヒューズ(Howard Hughes)の引越先ラス・ヴェガス(Las Vegas)へ向かうというものである。Book I を検討し

た後は、Book II, Book III を割愛して、ガンスリンガーの一团とハワード・ヒューズとの出会いがどのようなものになるのかを、Book IIII で確認する。その際に、なぜガンスリンガーの一团がハワード・ヒューズに会うのをやめて解散するのかを考えたい。

ガンスリンガーは、屈強なガンマンというより、慎重さと優美さを特徴とする(“The Cautious Gunslinger / of impeccable personal smoothness.”[*Gunslinger*3])。彼が気にかけているのはハワード・ヒューズの動向である。ただし、このヒューズは、私たち読者が知る実業家・発明家・飛行家・映画製作者で億万長者のハワード・ヒューズ(1905-75)ではなく、1833年に行方不明になった19世紀のダイナマイト業者である。ただし、19世紀のヒューズは、私たちの知る20世紀のヒューズと重なるところを持っている。ボストンという町の「ホテルの2階を借り切ったままにしている」彼には富豪の風格があり、「ラス・ヴェガスを買い取った」は20世紀のヒューズが1950年に行なったことだ。19世紀のヒューズも、20世紀のヒューズもテキサスの出身である。二人のヒューズを区別するために、前者を「作品内ハワード・ヒューズ」、後者を「ハワード・ヒューズ」としたい。ガンスリンガーは、語り手に「古いテキサス人魂が危機に瀕している」から「(作品内)ハワード・ヒューズ」に会いたいと語る(*Gunslinger*6)。だが、二人のヒューズは截然とは区別できない。「ハワード・ヒューズ」という同じ名前を持ち、テキサス出身で、富裕な二人は重なるからである。『ガンスリンガー』連作を読むには、「作品内ヒューズ」を「ハワード・ヒューズ」の原型ととり、同時に、二人は混然一体となっていると考えるとよい。

リルと語り手のやりとりから「作品内ヒューズ」について次のことが分かる。彼は、1832年には、テキサスのダイナマイト業者(“a texas dynamiter he was / back in ‘32”[9])で、いつでもリルの店の娘たちを興奮させていた。ヴェガスへ移ったそうだが、「ヴェガスを買い取って自分のところへ動かした」(“bought Vegas and / moved it” [9])とも聞いている。「あんたの友達はその男に取りつかれているわ」(9-10)とリルが言う時、「あんたの友だち」はガンスリンガーを指す。

テキサス出身の「作品内ヒューズ」は、20世紀の「ハワード・ヒューズ」を強く想起させるため、両者は同時に私たちの脳裏に浮かぶ。ガンスリンガーもガンマンとは書かれていないにも関わらず、私たちの頭の中では西部劇の屈強な拳銃使いとなる。このために、ガンスリンガーの一团がラス・ヴェガスで、「作品内ヒューズ」と「ハワード・ヒューズ」を倒すという物語が読者の脳裏に揺曳するのである。

ガンスリンガーは、店をたたんで一緒に行こう、とリルを誘い(40-41)、5人はラス・ヴェガスへ向かう。Book IIII までに、クール・エヴリシング(Cool Everything)とフラムボイヤント博士(Dr. Flamboyant)が一行に加わっている。コロラド平原のカフェ・サハガン(Café Sahagún)で一行が食事をすませ、クール・エヴリシングが勘定を聞くと、支配人は人差し指に書いた金額を示し、クール・エヴリシングの耳にその指を突き立てる。支配人は詩人の銃で頭蓋に穴を二つあけられ、クール・エヴリシングの耳に指でぶら下がったまま絶命する(156)。支配人の手は切断できたが、突き立った指は外れない。高名な指の専門家トント・プロント(Tonto Pronto)にも、指を外せない。もう一方の耳に、指を作って指してやろうかという始末だ(181)。支配人の指が外れるのは、Book IIII の終わり近くである。

些細な事がきっかけで、樽(Barrel)とポートランド・ビル(Portland Bill)が銃撃戦を始めそうになると、リルは「吐きそう」(197)と言う。俺の周りで吐くよと言って、樽は転がるが「メサの縁に達したとき、土の塊に当たって止まった」(197)。「そっちじゃない」とズリンガーが叫ぶと、大地が揺れて、樽は転がり、指はエヴリシングの耳から抜けて落ちた(“Wrong Way, the Zlinger called / and then the earth shook, / and the barrel rolled over, / and then the finger fell out of Everything’s ear” [198])。こうして、クール・エヴリシングが、長い間苦しめられた支配人の指から解放されると、『ガンスリンガー』連作全体に突然終わりの感覚が漂い、一同はラス・ヴェガス行きをやめ解散してしまう。「作品内ヒューズ」に会うという、旅の目的はどうなるのか。

スラブ(Sllab)は、「社会を成り立たせているのは／露骨な商業化だ」(“the blatant commercialization / on which the society built” [165])と言い残して、一行のもとを去った。商業主義や資本主義の悪と戦うつもりなら、ガンスリンガーは「ハワード・ヒューズ」やその原型「作品内ヒューズ」に戦いを挑むだろう。しかし、戦いは放棄される。クール・エヴリシングの耳に刺さった支配人の指が Book IIII で前景化されてきた。その指が外れたため、一行は大きな安堵感につつまれる。その結果、旅の目的は背景に退く。二人のヒューズの存在感は希薄である。他方、仲間の耳に刺さった指をどう外すかは、喫緊の課題だった。その課題が果たせた今、旅はピークを過ぎたのだ。ガンスリンガーは“Ah Dear Lilian, give me a kiss / You know my heart beats to another radio signal” (198)とリルに別れを告げる。故郷ワイオミングへ帰るリルと、モンタナへ帰る詩人に、砂煙の向こうから「さよなら」と手を振るガンスリンガーの姿が見える(200)。

ドーンは、オルソンの反資本主義を継承したが、作品中でそれを表すことはしなかった。

<ガンスリンガー以後>

ドーンは、*Abhorrences*(1990)で、1980年代のレーガン政権をやり玉に挙げる。最後の詩「白いバラの庭」(“The Garden of the White Rose”)では、来年も同じバラが咲くだろうが、白いバラの家が明るいの、「恐ろしい暗闇に対してなのだ」(“the White Rose, whose / house is light against / the threatening darkness” [*Collected Poems* 912])と、死の恐怖をうたう。

引用文献

Dorn, Edward. *The Collected Poems*. Edited by Jennifer Dunbar Dorn. Carcanet, 2012.

…*Gunslinger*. 50th Anniversary Edition. With an Introduction and a New Forward by Marjorie Perloff. Duke UP, 2018.

…*Hands Up!* Totem P, 1964.

Olson, Charles. *The Maximus Poems*. Edited by George F. Butterick. U of California P, 1983.

…*Muthologos: Lectures and Interviews*. Revised Second Edition. Edited by Ralph Maud. Talonbooks, 2010.